

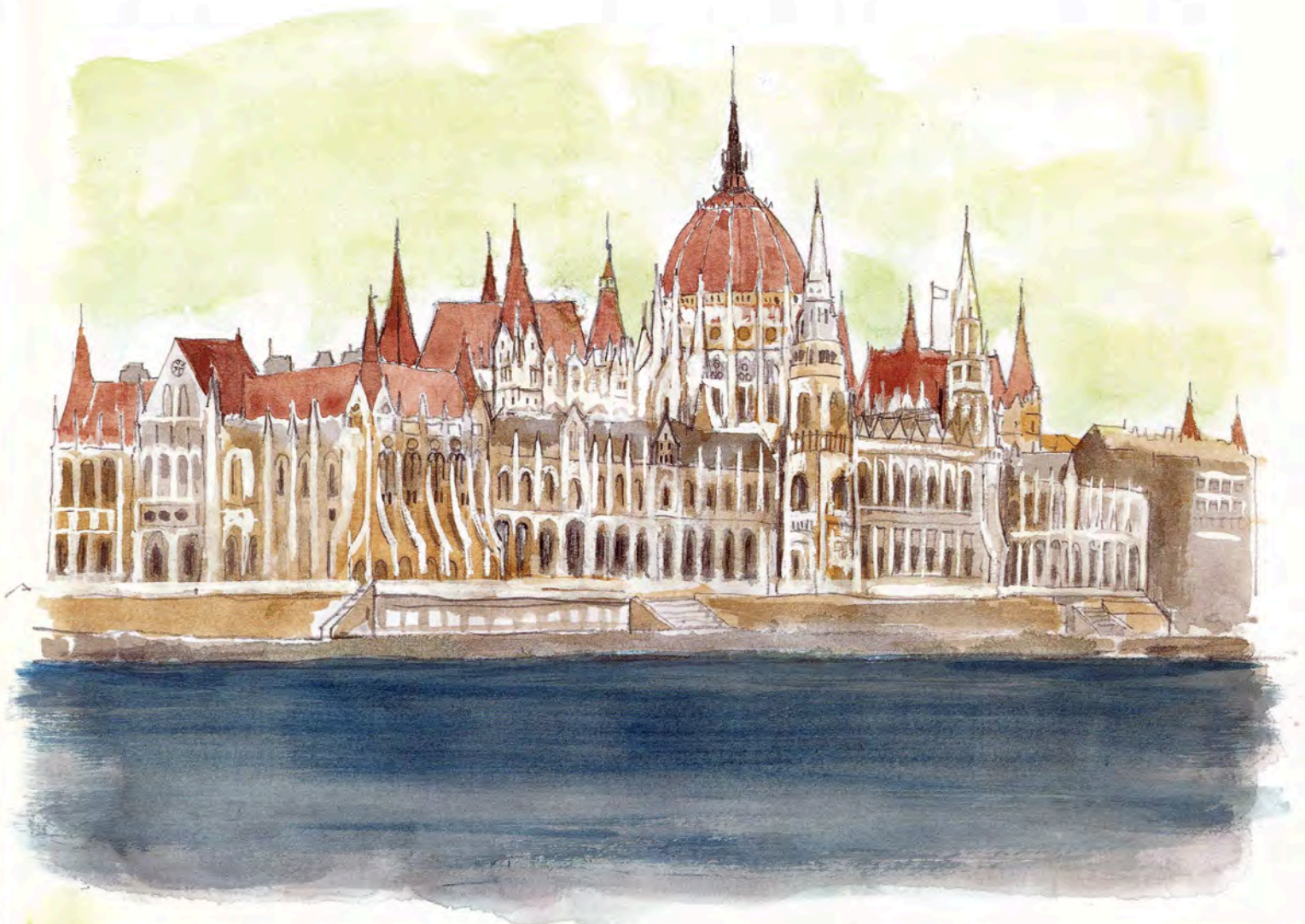
いなかがおか

Ⅲ

2010

No. 160

東京都世田谷区歯科医師会会報
<http://www.setagaya-da.or.jp/>



東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XXXII

下馬部会 齋藤賢一

今回は国内の2回目として滋賀県にある磨崖仏を訪れます。琵琶湖の周りは井上靖の「星と祭り」、白州正子の隠れ里など十一面観音で有名ですが、磨崖仏や石仏も素晴らしいものがあります。実はこれら石造物造営に関しては渡来人の関わりが重要なのです。ここでもう一度日本と朝鮮半島の関係を見てみますと、4世紀末から5世紀の始めにかけて秦氏と漢氏が我が国に集団渡来しました。朝廷は秦氏に山背と近江、漢氏には大和と河内に居住を許しました。秦氏は京都盆地を拓き、近江の湖東を開拓し、農耕、養蚕、機械などの文化を伝えました。そして商業を営み、財産を蓄えていきます。一方漢氏は朝廷の中枢で活躍する政治家や武官を輩出して、権力の座を占めていきます。5世紀末から6世紀にかけて高句麗に滅ぼされた百済の民がこぞって亡命してきます。彼らは大陸の新しい技術を日本へもたらしました。そして技術の分野に応じて鍛冶部、鞍部、陶部、錦部などの部民に編成され、古代国家の基準となる部民制を成立させるもととなりました。また諸博士、仏師など技術者を大和朝廷にさ

しだし、大和、河内、山背、摂津の畿内に次々と寺院が建立されました。7世紀の中頃には、百済、高句麗、新羅の人々が亡命してきます。琵琶湖の南部、東部（湖南、湖東）にはこれら渡来人が住んでおり当然優れた石工や彫刻師が工房を持ってい



写-1「阿弥陀如来」石山観音磨崖仏

たと思われます。湖南や湖東に優れた磨崖仏が残っているのも不思議ではありません。

滋賀県の東側は三重県と接して、鈴鹿山脈が横たわります。まずは快適な新名神高速道路で三重県の亀山インターへ行きます。ここから少し山の中に入ると石山観音公園があります。丘陵の岩に三十三観音の磨崖仏が、ふもとの岩には素晴らしい地蔵菩薩と阿弥陀如来が彫られています（写-1）。丘陵全体がハイキン



写-2「釈迦如来、阿弥陀如来、地蔵菩薩」花ノ木磨崖仏

グコースになっており、コースに沿って三十三観音や小さな石仏が安置されています。花之木磨崖仏は花之木小学校のプールの裏にあり、巨大な花崗岩にとっても珍しい組み合わせで釈迦、阿弥陀、地蔵が厚肉彫りされています（写-2）。忍者で有名な伊賀上野の周りにも磨崖仏があります。中之瀬磨崖仏は服部川に沿った道路のすぐ脇の巨岩に阿弥陀三尊と線彫りで地蔵、不動明王が彫ってあり雄大感を持った彫刻です（写-3）。伊賀上野の町はとてもきれいな町で表通りの電線は地下に埋設されています。裏通りも昔の面影を残す情緒のある町です。ここでぜひ食べてもらいたい名産品が伊賀牛で、隣の松坂に勝るとも劣らない最高の牛肉ですが松坂牛に比べてとてもリーズナブルです。歴史のある精肉店金谷のバター焼きがおすすめです。大量の大根おろしが入ったタレが絶品です。

伊賀上野から北に行くとライバル滋賀県の甲賀で



写-3 「阿弥陀三尊」中之瀬磨崖仏

小さな岩根不動磨崖仏もあります。

信楽近くの山の中腹に富川阿弥陀三尊磨崖仏があります。本尊の阿弥陀如来座像の総高は6m以上あり脇侍の観音菩薩、勢至菩薩を従えとても堂々としています(写-5)。韓国忠清

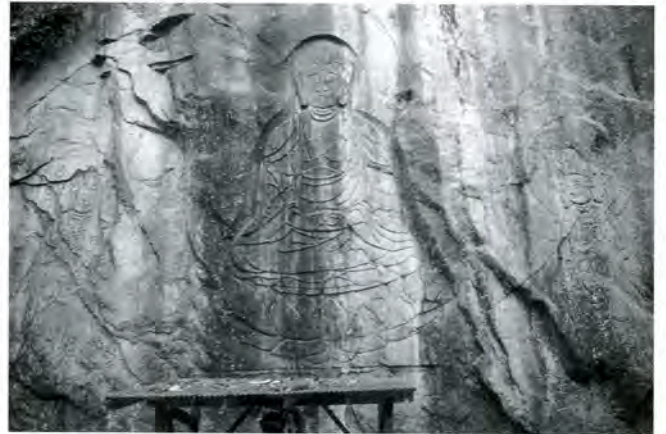


写-4 「不動明王」車谷不動磨崖仏

北道法住寺の磨崖仏を思い出します。信楽は宇治に近く高原になっておりとてもよいお茶がとれます。個人的には朝宮のお茶が好きです。

いよいよ今回のハイライト狛坂磨崖仏へ出発です。金勝山の中腹にあり徒歩で片道2時間弱かかります。コンビニでミネラルウォーターを買い、桐生キャンプ場の駐車場に車を止めて林道を歩き始めます。少し歩くとオランダえん堤(明治22年にオランダ人の指導の

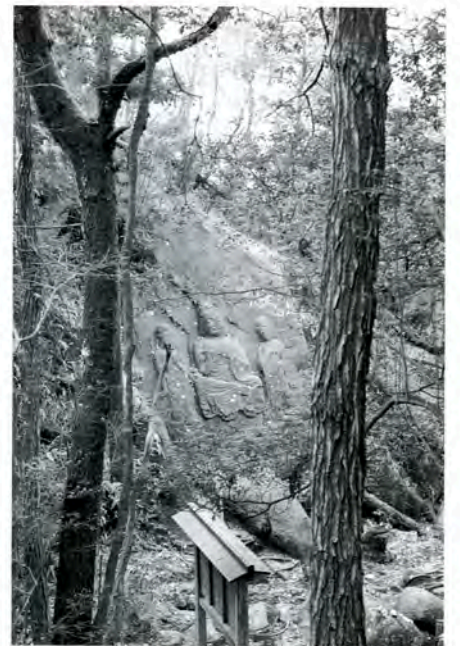
す。両方の忍者屋敷を訪ねるのも面白いかもしれません。甲賀には不動明王の磨崖仏が数カ所あります。特に素晴らしいのは野州川の北岸にある車谷不動で6mの大岩に巨大な不動明王が彫刻されています(写-4)。すぐそばにこれとは対照的な小



写-5 「阿弥陀三尊」富川磨崖仏

もとに作られたえん堤)がありとても素晴らしいロケーションです。溪流に沿って落ち葉の林道を進むと上を新名神高速道路が通るトンネルがあり、これを抜けてまた小川に沿って歩きます。だんだん登りがきつくなってきます。小川のせせらぎと小鳥のさえずりが気持ちよいのはここまでで突然道が細くなりさらに急になります。すると木立がなくなり巨岩が至る所に出ている韓国の南山みたいなところを抜け再び林の中をひたすら登ります。もう登るのが嫌になった頃突然林の中に石垣が現れます。これが816年建立された狛坂寺の跡で石垣と礎石だけが残ります。その先の少し開けた薄暗い木立の中に巨石が見えます。その巨石に何回も写真で見た我が国屈指の如来三尊が鎮座している

ではありませんか。中尊は弥勒如来と言われており両側に菩薩立像、頭上には蓮華座上の如来三尊が2組、左右にも蓮華座に立つ菩薩像が彫られ、向かって左側の小岩に如来三尊が彫られています(写-6、7)。新羅の影響が強い素晴らしい磨崖仏



写-6 「如来三尊」狛坂磨崖仏

で渡来人彫刻師の存在が考えられます。制作期は奈良時代後期から平安時代初期と言われていいます。しばらく眺めていると慶州の南山に登って見た七仏庵の磨崖仏を思い出し、作風も地形もとても良く似ていると思いました。



写-7 「如来三尊」 狛坂磨崖仏

もう一つ特に重要な場所は近江八幡の東にある蒲生町でここに石塔寺があります。阿育王山の額がかかっている山門を抜け、赤松林の中の急な石段を上りきるとそこに何万という五輪塔や石仏の中央に素晴らしい3層石塔が立っております(写-8)。この石塔は日本の木造の塔とは全く違った、韓国のブヨでみた百済の石塔です。三層石塔は、奈良時代前期の作とされ、三層石塔としては日本最古・最大のもので国指定の重要文化財です。



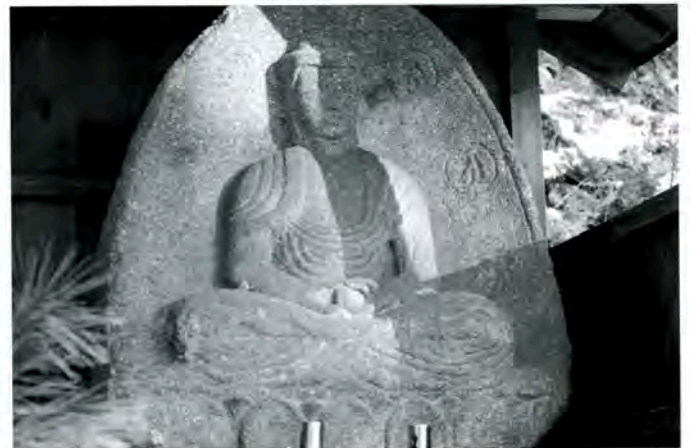
写-8 「三層石塔」 石塔寺

ここにも韓国の影響が感じられ渡来人の存在が大変重要です。蒲生のある湖東地区は日本書紀によると669年、滅亡した百済から渡来人700余名を近江国蒲生野へ移住させたとの記述があり、湖東一帯に百済人の村があったと思われます。当然石

工達も住んでおり、故郷を懐かしんで石塔を建てたとしても不思議ではありません。

湖東では近江八幡に泊まり近江牛を食べます。おすすめはやはり歴史のある精肉店西川です。ここの二階でサーロインステーキです。牛のトロ握り、オックステールスープも絶品です。日本の牛の食文化は近江商人が広めたと言われていたくらいですから近江牛ははずせません。

蒲生の北には百済寺、金剛輪寺、西明寺の湖東三山があり、紅葉の名所となっています。三山はいずれも本堂が山の中腹にあり長く急な階段を登らなければなりません。金剛輪寺の山門をくぐり階段を少し登ったところに立派な阿弥陀石仏が安置されています。光背に7つの種字(梵字)が刻まれており表情に硬さがありますが優れた阿弥陀仏です(写-9)。



写-9 「阿弥陀如来」 金剛輪寺

福林寺址磨崖仏は野州の外れにある小山の中腹にあります。斜面がきつくどこに福林寺があったのか興味がわきます。大きな平らな岩の側面に稚拙な仏像が連



写-10 「石仏」 福林寺跡

続いて彫られているものが数個あり、それとは別に数体のしっかり彫刻された仏像がある岩があります（写-10）。この近くにもう一つ妙光寺址磨崖仏があります。野州中学の裏にある赤鳥居から登っていくのですがこれが結構きつい坂道なのです。笹の間を抜けとでも細いケモノ道のようなところをひたすら登ると頂上付近の大きな岩に蓮の上に立つ地藏菩薩が彫られています（写-11）。この山からは野州の町がよく見渡せます。

今回湖東、湖南を中心に磨崖仏を見学しましたが、この近くには御上神社、大笹原神社、稲村神社と国宝の神社が3つもあり重要文化財の神社も沢山あります。湖東三山の金剛輪寺、西明寺、常楽寺、長寿寺、善水寺と国宝の本堂や塔もあり湖南に



写-11「地藏菩薩」妙光寺山磨崖仏

は有名な石山寺、三井寺と国宝の宝庫です。湖北に目を向ければ湖に浮かぶ竹生島、ここには豊臣秀吉が祀られた豊国廟から移築した国宝の宝厳寺と竹生島神社があり、渡岸寺を始め十一面観音を祀る小さなお堂があります。さらに北には朝鮮、中国に開かれた港敦賀、小浜があり、古くから奈良京都の玄関として異国の船を迎えていました。小浜は小京都、海のある奈良と呼ばれるように沢山の古刹があります。特にお水取りに使われるお水を送り出すお水送りや奈良まで運んだ塩、京都に鯖を運んだ鯖街道など都との関係が偲べれます。奈良や京都の寺院建立に使われた木材もここから切り出されたものです。湖西は比良山地が衝立てのように湖に迫り、その中に比叡山があります（写-12）。比叡山のふもとの坂本には全国山王神社の総本宮日吉大社があり国宝重文の数は26もあります。滋賀



写-12「湖東より比良山地をながめる」

県は文化財が沢山ありますが京都や奈良のように有名ではありません。しかし文化、経済すべての面でこれら都を支えていたのは近江なのです。先進の文化を持っている渡来人の働きはあらゆる面で必要とされました。当時の近江は奈良の都と特別な関係があったようです。大津宮、恭仁京遷都をおこなったり、紫香楽に離宮を造営したりしました。また寺院造営には東大寺の良弁が関係しています。当時の人々も葦の間から吹く風に身をまかせ夕日に染まる比良山地を眺めていたと思います。そして故郷百済や新羅を懐かしんでいたのではないのでしょうか。